## 【曲目解説】

歌劇「椿姫」は説明の必要もないほどの名作ですが、今夜演奏するのはその幕開け前に奏される前奏曲です。ロ短調の暗い和音で始まり、主人公の悲劇的な最後を連想させる憂愁に満ちた旋律が流れる短い部分に続き、ほのかな甘みと清らかな憧れを感じさせる美しい旋律とパリの享楽的雰囲気、パーティーの軽やかな華やかさを描く律動が絡み合って進行し、ホ長調の和音で閉じられます。

「協奏交響曲」（サンフォニー・コンセルタント）は、18 世紀後半にパリを中心に流行した、正に名前通りの交響曲と協奏曲の中間形態。複数の独奏楽器群と管弦楽から成り、バロック時代の合奏協奏曲に似た形態ですが、独奏の役割ははるかに重要なものになっています。モーツァルトには、このジャンルの作品としてもう 1 曲、ヴァイオリンとヴィオラを独奏とする作品があります。今夜演奏する曲は、それに対して管楽器を独奏楽器群とするものですが、モーツァルトの真作ではない、とする偽作説もあります。確かにモーツァルトらしからぬ点もあるのですが、演奏者も聞き手も十分に楽しめる優れた作品です。特に独奏楽器間の旋律の受け渡し（会話）のおもしろみは注目される点でしょう。

蔵石嵐の「ソプラノとオーケストラのための３つの歌」は、もともとは「病院の窓」と題された５曲からなるピアノ伴奏付の混声合唱組曲です。そこから作曲者自身が３曲を選んでソプラノ独唱と管弦楽のための組曲として作り直したものです。合唱曲の内容は、不治の病に冒された少年が病院のベッドから眺めた窓の外の５つの季節（秋・冬・春・梅雨・夏）の移り変わりを描いたもので、今夜演奏する管弦楽版では後半３つの季節が歌われます。宇多川久の詩では、どれも「隠す」という語がキーワードになっていますが、「隠す」ことによって「顕わされるもの」、「隠す」ことによってのみ「顕れるもの」があるというのでしょう。

シューマンの交響曲第４番は、作曲の日付からすると、彼の２番目の交響曲です。1841 年 12 月 6 日にライプツィヒで初演されましたが、好評とは言えなかったようです。1851 年になって、交響曲第３番「ライン」を書き上げたシューマンは、その余勢を駆り、このニ短調交響曲の改訂の着手、1853 年 12 月 30 日デュッセルドルフで、低地ライン音楽祭の折、シューマン自身の指揮で新版の初演がなされ、以来「第 4 交響曲」とされています。曲は、伝統的な４楽章形式をとってはいるものの、主題上の関連も深く、切れ目なく演奏されることから、４つの部分からなる１楽章形式の幻想曲ないしは交響詩の性格を帯びていると言えるでしょう。